

がん医療
推進委員会
だより

がん患者様とご家族をチームでサポートいたします

患者ケア・ACCP ワーキンググループ 活動紹介

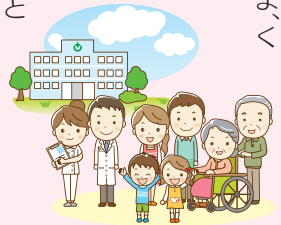
がん医療推進委員会 患者ケア・ACCP(アドバンス ケア プランニング)ワーキンググループの「療養サポート・退院支援」の活動についてお話し致します。

当病院には「療養サポート・退院支援」の活動を行う緩和ケアチームがあり、緩和ケア医師、緩和ケア認定看護師、病棟看護師、入退院支援看護師、訪問看護師、薬剤師、管理栄養士、リハビリスタッフ、歯科衛生士など多職種メンバーで情報共有、連携・協働しています。身体的・精神的・社会的・スピリチュアル的にサポートが必要な方に対し、苦痛や苦悩を緩和する方法やその人に必要なケアや療養サポートについて、お互いの専門的な意見を共有し合い、個々の患者様にとって最適な療養について話し合い、介入を行っています。相談内容は、痛み、のコントロールや腹部膨満感、呼吸困難感などの身体的苦痛、不眠や不安などの精神的苦痛、また、在宅療養についての相談など様々です。

担当医から、「抗がん剤治療などの積極的治療を終える時期です」とか、「病氣と闘う治療から病氣とつきあっていく治療へシフトしましょう」という説明がされたら皆さんは何を考えるでしょうか。身体的な苦しみから解放されたい、家族と共にいたい、財産の整理や最期のセレモニーのことなど様々なことが頭をよぎるのではないのでしょうか。頭の中が真っ白になり何も考えられなくなるという状況も考えられます。通院や入院を継続して苦痛症状の緩和や、精神的なサポートを受けていただきながら、残された時間のことを考え始めなければなりません。日本人は欧米人と比べ、この内容に関して「タブー」とされている傾向が強くあり、ざりざりの状態まで大切なことを伝える

ることがなされないまま、くやしい想いで旅立ちを迎える方もいらっしゃると思います。「自身の想いをしっかりと伝えることができる時に、つらい内容ですが、家族の方や想いを伝えられる方と一緒に話しておく、ノートなどに書き残しておくことなどはとても大切な事だと思えます。今は昔と違い、テレビの宣伝で「終活」という言葉や「エンディングノート」という言葉を耳にしますね。お互いの想いや考えを伝えておくことは、残して旅立つ側、見送ってその想いを胸に生きていく側、双方にとって心をつなぐ大切な作業になるのではないのでしょうか。

旅立ちを迎える前の療養について考えたことがありますが、住み慣れた自宅で家族と一緒に過ごしたい、緩和ケア病棟に入院したいなど選択肢は様々です。ご自宅で過ごされる場合は、色々な社会サービスを活用することで療養をサポートすることが出来ます。病状の経過の中で、身体症状や精神状況の変化に伴い、想いは揺れ、当初希望していたことが変わることもよくあることです。患者様はもちろん、ご家族の方の想いもあるでしょう。たくさんお話ししましょう。ちょっとした疑問、不安に思うことなど一緒に考えていけます。どうぞ気軽に声をお掛けください。一緒に人生会議をしましょう。あなたの気持ち聴かせてください。患者様やご家族の方と、チームメンバーが一緒に考えていきたいと思っています。



一般外来 金城りか (緩和ケア認定看護師)

今年もエコー研修を行いました!

10月に入っても、沖縄は相変わらず暑い日が続いていますが、いかがお過ごしでしょうか? 今年も新型コロナウイルス感染拡大の影響により、皆様におかれましては長引く自粛生活をどのように充実させるか、思慮を巡らせていることでしょうか。

この広報誌が発行される頃には、感染拡大が抑えられ、緊急事態宣言の解除がされていることを願いながら、8月28日に行われたエコー研修について、執筆に取り組んでいる次第です。

さて毎年夏期に開催される「エコー研修」は、一年目研修医に向けて当病院の臨床検査部生理検査室スタッフが超音波検査を指導する、という文章にしてしまつと堅苦しさ・退屈感のイメージが先行してしまつ企画です。しかし、実際は和気藹々・意気揚々とした雰囲気の中で検査技師が培つた超音波検査技術を、会話の糸口とし、一年目研修医とコミュニケーションをとることを目的とした企画になっています。

冒頭でも触れましたが、この企画においても新型コロナウイルスの影響を受けて参加者の感染対策を徹底し、規模を大幅に縮小した形式で開催しました。例年ですと、座学(超音波装置の基礎や症例提示)などを含んだ四時間程度の企画ですが、今年はハンズオンのみの一時間



半となりました。ハンズオンとは、実際に超音波検査装置を使用して、企画参加者の各臓器を研修医が写真を撮ることです。今回、特に救急外来で必須のスキルを習得してもらうことに集中してもらいました。超音波検査技術を習得するには、一時間半では短すぎますが、これをきっかけに臨床で超音波検査を施行し、診断の助けになつてくれればと期待しています。

毎年この企画を通して、研修医と生理検査スタッフの間にも何とも表現しづらいツナガリのような物が構築されていくのを感じます。このツナガリの正体はおそらく仕事仲間と友達との境界線にある何か曖昧な関係性に近いものですが、確実にお互いのメリットになる関係性と信じています。そして、この両者の関係性が患者様にとって利益になると確信し、心の中で企画の成功に喜びをかみしめ、この駄文の筆をおこうと思えます。

臨床検査技師 主任 照屋貴大